

大正出版界における関東大震災の影響

——日本最大の出版社 講談社はどこから来たか

亀井ダイチ・アンドリュウ

はじめに

二〇一一年三月十一日に起こった大震災は、東北・東日本にかなりの打撃をもたらした。神田外語大学のある幕張周辺も、かなりひどい地盤沈下などの被害を受けており、震災後しばらくは満足に水道が使えず、困った人もいただろう。また震災の日、首都圏の電車のほとんどがその運行を停止したため、いわゆる「帰宅難民」になった人もかなりの数にのぼった。このように首都圏もかなりの混乱に陥ったが、震源地に近い東北の被害はその比ではなく、言語に尽くせぬほどの被害をもたらした。あのマグニチュード九もの大地震と地震直後に起こった津波は、多くの貴重な人命と、ごく当たり前に毎日続くと思われた日常生活とを暴力的に奪っていったのである。

このような震災は、みなさんにとって人生初めての経験であったと思う。しかし、こうした大地震そのものは、日本の歴史上、未曾有のものではない。海底プレートの関係で日本には地震が多いことが知られており、かなりの大規模な地震も古代から何度か起っている。最近では一九九五年に起こった阪神・淡路大震災があるが、これは覚えている人もいるのではないだろうか。この時の地震も人命・インフラともに甚大なる被害をもたらしている。しかし、今日みなさんにお話ししたいのは、今をさかのぼること九十年あまり、大正十二年（一九二三）に東京・横浜を中心起こった関東大震災のことである。

一、大正関東大震災とその被害

関東大震災が起こったのは、大正十二年九月一日の土曜日。

正午まであと数分、という時間帯だった。地震の規模はマグニチュード七・九。当時は現代とは異なり、地震に対する建物の耐震基準等がきちんと設定されていなかったため、地震の揺れそのものによる建物の崩壊などの被害も甚大なものとなった。東京では初の高層建築物であった浅草の「凌雲閣」(明治二十三年築)は、十二階建てで、十階までは総レンガ、上部二階は木造の、八角形の形をした高さ七十メートルあまりの建物であり、当時の東京のランドマークでもあったが、関東大震災により八階部分から上が崩れ落ち、地震発生時に上部にいた人々は、建物とともに犠牲になっている。

しかし、東京に最大の被害をもたらしたのは、地震の揺れそのものではなく、その後起こった大火災であった。地震の発生時刻が昼頃であったために、食事の準備で火を使っていた住宅の台所や飲食店から発生した火災が、倒壊した建物に燃え移り、大火災となったのである。そのうち、最も被害がひどかったのは東京都本所区、今の墨田区あたりであった。この区の西端に、陸軍被服廠の跡地である広さ二万四千坪にわたる空き地があったが、この広大な空き地を格好の避難場所と考えた四万もの人々が家財道具を抱えながら、ここに避難してきたのである。地震だけであつたら、そこに避難してきた人々の多くは助かったはずだつた。

ところが、午後四時頃に三方から襲いかかった炎がすべて

を変えてしまった。人々は猛火に取り囲まれ、またそこに起こった大旋風が、家財道具ばかりでなく、人間までも空中高く巻き上げ、渦巻く炎が空き地全体を覆いつくし、人々を焼き尽くしたのである。この被服廠跡地における死者数は、三万八千人もの数に上った。これは、ここに避難した人々のおよそ九十五パーセントである。被害の甚大さが分かる。また、ここまで大規模な火災による被害は他にはなかったものの、東京一帯に燃え広がった炎が完全に消し止められたのは、地震発生二日後の九月三日午前十時。その結果、東京では三十万以上もの家屋が焼失し、五万二千人ほどの焼死者を出した。

そうした中でどうにか生き延びることができた人々も、とても安心とは程遠い状態にあった。二〇一一年三月の地震の後も数えきれないほどの余震が続いたが、大正関東大震災の時も、翌日にはマグニチュード七を超える最大余震が起こり、それからひと月の間に感じられた余震の数は七二一回にも達している。家族を失い、絶え間なく続く余震の中、電信・電話、新聞などの情報機関はほぼ壊滅状態にあり、情報を求めるようにも求められない状態で、人々の不安と恐怖は極限に達していた。社会全体が混乱に陥り、疑心暗鬼にとらわれた人々の間でさまざまな流言飛語が飛び交い、「朝鮮人虐殺」という第二次被害まで生み出す結果になったのである。

二〇一一年三月十一日の震災まで、日本の地震観測史上、最大にして最悪を記録したといわれる大正関東大震災。その被害は当時の人々の想像をはるかに超えていた。被災者数は三三〇万人以上、政府の損害は前年の予算の三倍以上。その影響は、政治・社会・経済・文化といった、ありとあらゆる方面に及び、新しい時代を作っていくきっかけともなったのである。そして、今日のテーマである出版界も、決してその例外ではなかった。

二、出版界が受けた打撃

多くの古本屋が軒を連ねる「本の街」として知られる神田神保町。このあたりには大正時代も出版社や取次、書店が集中していたが、震災の火災は容赦なく襲いかかり、一部を除きほぼ全域が焼け野原となった。書店や倉庫にあった書籍も例外ではない。神田周辺の焼失によって失われた書籍は、数百万冊にのぼった。また、神田の隣の本郷にある東京大学では、「東洋文化の殿堂」と謳われた図書館にも火の手が及び、その結果、さまざまな貴重本・典籍が失われ、蔵書七十六万冊のうち一万冊を残し、すべてが焼失した。現在とは異なり、コピー機やパソコンなどなかった時代のこと、本の価値も今とは違って高いものであり、簡単に複製ができるような状態

ではなかった。そうした時代における数百万冊に及ぶ書籍の焼失は、日本の文化生活の基盤を揺るがしたとも言えよう。また、出版の主な機能は神田周辺に集中していたため、そこが壊滅的な被害を受けたということは、東京周辺に限らず、全国の出版業界に少なからぬ打撃を与えることになったのである。

地震が起きてから約一週間後の九月八日に発行された『大阪新聞』には、「雑誌が全滅した」との見出しで、日本の印刷文化が大打撃を受けたこと、十月からの雑誌発行はほとんど見込めまい、と東京の実況調査の結果に基づいた記事が掲載された（『日本出版販売史』一八五頁および一九三頁）。東京の出版業界が生産機能を失い、その後の見込みが立たないということとは、地方の書店や取次にとっても、生きるか死ぬかという事態だったのである。地方の書店は、大阪や京都などの被災していない大都市に押し寄せ、各問屋や出版社を駆けまわって現金取引で在庫品をかき集める、というような非常事態が起こった。しかし、東京の出版業界が壊滅的な打撃を受けた中ではそれも充分ではなく、「もう本屋は駄目だから、荒物屋になった」とか、「私の方も長い間お世話になったけれども、こんど転業することになりました」（『日本出版販売史』二九七頁）という挨拶状を東京の出版社に送ってきた地方の書店もあったほどである。どれだけの大打撃であった

か、これだけでも充分推察できよう。では、こうした地方からの声を受け、東京の出版業界はどうしただろうか。

三、復興に向けて——講談社の活躍

ここで注目したいのが、講談社の存在である。

日本には多くの出版社があるが、講談社を知らない人はほとんどいないであろう。講談社は、「おもしろくて、ためになる」出版を」という言葉をモットーに、漫画や雑誌をはじめ、学術書からテキストにいたるまで手広く多種多様な本を出版しており、意識したことはなくとも、今まで手に取った本の中に講談社が出版した本がいくつもあるのではないかと思う。今でこそ日本最大の出版社としてゆるぎない地位を有している講談社だが、関東大震災以前は、出版量こそ多かったものの、一部からは「成り上がり者」として見られており、出版界での立場は決して確固たるものではなかった。岩波書店や新潮社が、哲学書や文学書をその看板として出版界に重きを置いていたのに対し、一般読者向けの出版物を主に手掛けていた講談社は、同業者の間ではあまり高い評価を受けてはいなかった。

しかし、そうした出版界の状況は、関東大震災を境としてがらりと変わることになる。講談社の創業者で当時社長だっ

た野間清治は、この大震災に際しての自分の気持ちを次のように語っている。

ぼんやりしている時ではないぞ、すでに起こったことは今さらこれを嘆いても仕方がない。この際、われわれは精一杯の力を尽くして、何事か天下のために尽くすところを復興させなければならぬ。何よりもまず第一に、われらの事業を復興させることだ。われら雑誌界の復興を図ることだ、これが天下のために尽くす道であり、また災厄に逢った同業者に対する務めでもあると考えたのであります。

〔『出版人の遺文(8) 講談社 野間清治』、一九五頁)〕

東京の大半が焼け野原になった中で、小石川区音羽町にあった野間清治の自宅の被害は比較的軽微であった。また、三階建てで、当時としてはちょっと目立った建物であった東京堂をはじめ、多くの出版社の建物は倒壊などの被害を受けたが、講談社の社屋はごく一部が潰れた程度で、大体は無事であった。講談社の当時の社屋は当座凌ぎのつきはぎした建物であったのだが、大地震においては、それがかえって幸いしたのかもしれない。しかし、建物が倒壊しなかったからといって、まったく無事であったわけではない。他の出版社や取次と同様、講談社の社員たちも、必死に社の重要書類などを守ろう

としていた。それを聞いた野間清治は、次のように感じたという。

講談社におけるわが社員、少年の活動ぶりを聞きながら、一方私は救済、復興の計画をいろいろ考えた。わが社としては出版界その他の方面で、何をなし、何を行って、この機会に御国のため、大勢のために尽くすべきかを考えた。これは新に未曾有の災害である。この対策に一刻も猶予すべきではない、義勇公に奉ずべきの時だと思つた。(同前、一九一〜一九二頁)

野間清治の気概は感嘆すべきものではあるが、では、こうした志を胸に彼が実際に行なったことは何だったのだろうか。大地震が起こった九月一日時点において、各雑誌の十月号は出来上がる間際であった。これは講談社だけに限らず、他の出版社も同様である。しかし、印刷所や製本所の多くが被害にあったため、すぐに出版できる状態にはなかった。そこで出版社同士で話し合い、雑誌は一カ月の間休刊することが決まったが、その間何もしない、というのには野間の志に反していた。野間と講談社の社員は、絶え間なく続く余震の中、何度も何度も会議を開き、講談社として何をすべきかを考えた。その結果、この未曾有の震災の被害実態をまとめて本に

し、出版するのが出版社としての義務だという結論に達したのである。そうして生まれたのが、『大正大震災大火災』という本であった。

一面炎に覆われた燃え盛る東京を表表紙にしてこの本が出版されたのは、地震発生からちょうど一カ月後の十月一日のことであった。内容については以下に述べるが、まずこの本が当時の同業者からどのように受け取られたかについて言及しておきたい。

あの本がこの業界全体をどれだけ勇気づけてくれたか。地方の小売屋さんもこれで「東京はだいじょうぶ」という感じを持ったために、売掛けの回収が実にスムーズにいった。もし、あれがあのように迅速な手配でなく、三カ月も四カ月もたってから出たんではどうだったかと思つくと、ゾツとするよ。(『日本出版販売史』、二九五頁)

これは、出版社でもあり取次でもあった北隆館社長・福田良太郎が当時のことを振り返って述べたものである。また、後世においても「当時瀕死の状態にあった業界に活を入れ、復興への転機をつくった歴史的出版」(『日本出版販売史』、二九四頁)として、非常に高い評価を受けている。

当時の出版界から救世主のように扱われたこの『大正大震

『大震災』だが、では中身はどんなものだったのだろうか。もともと大震災の被害を記録に残そうとして作られた本であるから、その被害状況はかなりいろいろな方面にわたってまとめられている。ここに、その目次の一部を挙げよう。

大震災記

大火災記

噫、斯くして三殿下は神去り給ひしか

死灰の都をめぐる

地方の惨状

震災中の内閣組織

機敏なる当局の措置

目覚しき各種機関の活動

鉄道の惨害と応急始末

通信交通その他機関の惨害と応急始末

経済界の大打撃と将来

政府の反応や交通機関・経済界に与えた打撃。また百二十枚以上の写真を載せ、できるだけ忠実に震災の被害を伝えようとしている。

震災の直後であったから、一歩外へ出れば本の作成のもとになりそうな情報はいくらでもあった。しかし、その中には

真偽のはっきりしない噂だけのものも多く、何が正しいか正しくないかを判断するのは至難の技であった、と野間清治は当手を振り返って述べている。また、たとえ正しい情報であったにせよ、震災の状況を幅広く、忠実に伝えようと試みた講談社の目的を考えると、ただの感情的な、主観的な感想だけで頁を埋め尽くすわけにはいかない。確かに「鬼神も面を掩ふ悲話惨話」や「人情美の発露! 美談佳話」などの項目も目次には見えているが、それは三〇〇頁以上にわたるこの『大正大震災大火災』の六〇頁ほどに過ぎない。

また、後半には「震災が生んだ新商売珍職業」や「感謝すべき世界各国の同情」「復活する大東京」などの項目が見られ、震災後一カ月も経たないうちから、世界のサポートを受けながら人々がたくましく生きようとしていたことが分かる。その他、「地震時の諸注意」や「恐るべき震災後の病氣と注意」「地震と火事に関する伝説」「地震の話」など、今後の具体的な行動の指針になるものや、地震に対して知識と理解を深めたい人たちの知識欲を満たすような項目も見受けられる。前述したように、この本が出版されたのが震災からちょうど一カ月後という、当時の事情を考えればかなり迅速な出版だったことを考慮に入れると、この内容の幅広さ、バランスの良さ、内容の濃さは感嘆すべきものである。

その内容は、同じく震災後に刊行された別の本と比べると、

より際立ってくる。『大正大震災大火災』が出版される十日ほど前、震災からわずか三週間後の九月二十一日に、誠文堂という出版社から『実地調査 大震災の東京』という本が出版された。震災直後の東京出版界の動きとしては最初のもので、その点においてはこの本の出版も講談社の『大正大震災大火災』と同じく、歴史的な出来事であったと言える。前述した、東京のランドマークであった凌雲閣の倒壊後の姿をその表紙として出版された『実地調査 大震災の東京』は、短期間で二万八千部を売り上げたが、『大正大震災大火災』が出版されて間もなく、その増刷をやめてしまっている。震災の概況について全二〇〇頁ほどの大半を費やしているが、書き方としてはかなり主観的、かつ内容にも偏りがあるが、その十日後に出てきた『大正大震災大火災』が「出版界復興の基礎を確立した」ほどの重要性を持つことはなかった。

『大正大震災大火災』は、関東だけではなく全国に配送・販売された。初版の三〇万部は言うに及ばず、二回の重版を経た合計四〇万部が一部残らず売りつくされている。その点、前述した「もう本屋はだめだ、やっていけないから転業する」という地方の声にも講談社は応え、東京の出版界が下り坂になるのをくいとめるだけではなく、復興の力強い一歩を踏み出す役割を果たしたのである。

四、講談社の成功の原因

——「おもしろくて、ためになる」出版を

「出版界復興の基礎」とまで称された『大正大震災大火災』だが、震災直後の混乱の中、ただの主観的なルポルタージュに終わることなく、これだけまとまった内容の濃い本を一月で講談社が出版できたのはなぜだろうか。講談社の社屋、また社長の野田清治の自宅ともに大きな打撃は受けなかったことなど、講談社の被害が比較的軽微であったことが一つの大きな要因として挙げられよう。しかし、ここでもう一つ注目したい点がある。それは『キング』という雑誌の存在である。

今でこそ忘れられているが、実はこの『キング』は講談社を代表する看板雑誌であり、日本の出版史の中で初めて一〇〇万部を突破した、日本を代表する国民的雑誌であった。今の講談社のモットーでもある「おもしろくて、ためになる」雑誌を作ろう、という考えのもとに、講談社はその創刊に向けて二年以上も準備に費やしている。子供から大人まで、誰が読んでも楽しめるよう、一家に一冊といった雑誌になるよう、この『キング』の編集者には野間清治の夫人や子供をはじめとする、いろいろな立場の人が関わっていた。編集会議においては、その中の誰かが「駄目だ」と言えば、どんなに

いいと思えるアイデアであっても却下になったほどである。販売元からすれば、新しい雑誌の創刊号など、どんなに好意的に見積もっても二〇万から三〇万部が最大としか思えなかった当時、野間清治と講談社の営業は五〇万部出すと言って譲らなかった。それは講談社の『キング』にかける意気込みとともに、重ねてきた準備による自信に裏打ちされたものであったのだろう。その自信——販売元からすれば一種の賭けでもあったが——は、決して的外れではなかったことが、販売結果によって見事に証明された。当初の五〇万部がすべて売り切れたのみならず、七四万部まで重版を重ね、プレミアまでつくという期待以上の好調な滑り出しを見せたのである。

震災が起こった大正十二年、講談社は『キング』を翌年の大正十三年の新年号から創刊するために、全社の英知を集めて準備に取り組んでいた。しかし、九月の震災発生を経て、野間清治はその準備作業を一時延期し、全員を総動員して『大正大震災大火災』の刊行に向けて全力を集中させた。そうして生まれたのが『大正大震災大火災』なのである。先にみたように、この本は震災の被害の詳細から、政府の対応、公的・民的組織の活動、人情話から具体的な助言、専門家による地震知識など、かなり幅広い項目を網羅している。流言飛語に惑わされないように情報・写真を取捨選択し、ほんの一カ月で一冊の本にまとめて出版するということができたの

は、またその出版・販売が「出版界復興の基礎」となるほどの成功をおさめたのは、講談社が「一家に一冊」となるような雑誌『キング』創刊のために重ねてきた準備と決して無縁ではない。むしろ、「大震災に際して出版界が何をできるか、しなくてはならないか」という野間清治の自身への問いかけに対する答えの一つが、講談社が社運をかけて準備してきた雑誌『キング』の編集技術を活かして、未曾有の大震災の事情を正確に伝えるための『大正大震災大火災』の出版であった、と言えるだろう。

最後に、『大正大震災大火災』の後ろについている出版広告を紹介したい。

図1は『魔の女』という探偵小説の広告で、一頁の半分以上を占めている。図2では、「白き女奴隷の悲惨な運命と獨逸誘拐法の暴露」という見出しとともに、エリザベート・シェーンの『人肉の市』というドイツの翻訳小説が堂々と一頁を使って紹介されている。未曾有の大震災の被害をまとめた歴史的な本の裏に、こうした人目を引く大衆向けの娯楽小説的な広告を載せるのは不謹慎だ、と思うだろうか。

しかし、関東大震災とその被害のセクションで述べたように、震災の直後から世間には流言飛語が蔓延し、罪もない朝鮮人をはじめ多くの社会主義者たちが混乱に乗じて虐殺の憂き目にあった。そうした悲劇が起こった原因の一つは、震災

によって引き起こされた社会的不安の爆発、人々の恐怖と不安の行き場のなさであった。何が起ったのか、何が本当で何が偽りなのか、これからどうしたらよいのか、きちんと判断を下すにはあまりにも情報が少なすぎ、また絶望から心を切り替えて立ち上がるには、あまりにも重い現実が目前を覆っていた。心の逃げ場のない情勢の中、こうした娯楽小説が当たり前のように広告に載る、ということとは、人々の追いつめられた気持ちを外へ向ける娯楽が提供されるという保障でもあったのである。上述した広告のほかにも、『大正大震災大火災』は講談社がすでに発行していた『講談倶楽部』（「面白くて為になる雑誌界の横綱」というキャッチコピーつき）や『現代』（「一冊で社会の事は何でも判る理想的雑誌」のキャッ



図1



図2

チコピーつき）を紹介し、また名士や一般読者によるそれらの雑誌の評判も積極的に掲載して、読者の購読意欲を誘っている。もちろん、それは講談社が自社の他の出版物を売り込む販売戦略の一環でもあったであろう。しかし、それだけではなかったことが、以下の広告文によく示されている。

禍を転じて福となし、悲境に際しても樂觀して暮らすことが処世第一の要訣であることは今更云ふ迄もなく皆様御承知のこと。處がなか、イザとなると平常思つてゐた様にはならぬもの、そこが考へ處ではなからうか。さてそれなら、どんな思案を廻らしたのか。さる喧嘩好き(?)の御夫婦が御座つて日がな毎日大喧

嘩を続けてゐたが、何時の頃からかバツタリ止めて罵聲が笑ひ聲と變つた。今度は隣近處が承知しない。どうした和樂の妙薬を得たのかと探つて見ると評判の雑誌『面白俱樂部』を夫婦で交るゝ、讀んだり聞かせたり……とは嘘の様な實話

ここでの「禍」「悲境」は、たわいない夫婦喧嘩である。しかし、現実には当時の人々が直面したのは、未曾有の震災という「禍」であった。『大正大震災大火災』に掲載されたさまざまな雑誌や娯樂小説の広告は、日常生活を突如暴力的に奪われた人々に、生きる上での楽しみを与え、悲境においても樂觀的に暮し、社会的な不安を和らげ、将来への希望を持たせる効果をもたらしたのではないだろうか。

おわりに

「おもしろくて、ためになる出版」を目指す講談社。震災前は、出版界において「成り上がり者」としての位置しか占めていなかった。しかし、創業者・野間清治の「大震災において、被害が少なかったわが社ができるか、しなくてはならないか」という使命感のもとに作られ、震災後わずか一カ月で発行された『大正大震災大火災』は、講談社が「日本

最大の出版社」となるきっかけとなった。

『大正大震災大火災』は、流言飛語にあふれる中からできるだけ正確な情報を取捨選択し、震災の情報を幅広い項目にわたつてまとめ、その被害状況をこと細かく、かつ正確に全国に伝える役目を果たした。また同時に、講談社の得意とする娯樂雑誌・小説の広告を大々的に掲載して社会に希望と楽しさを広げ、人心の安定にも貢献したのである。

これが、講談社としての震災に対する社会の対応の最初の一歩であった。多くの困難の中で生まれた『大正大震災大火災』は全国に歓迎され、合計四〇万部の売り上げを見ただけではなく、震災により多大な被害を受けた東京出版界の復興の基礎を築いたのである。

参考文献

- ・『出版人の遺文(8) 講談社 野間清治』(栗田書店、一九六八年)
- ・橋本求『日本出版販売史』(講談社、一九六四年)